

英語の学力意識に関する研究

— 高校生および大学生の傾向 —

内 藤 徹

(2009年1月15日受理)

A Study on the Learners' Awareness of Their Own English Abilities

— Of the high school and college students —

NAITO, Toru

キーワード key words

形成的評価 (formative evaluation)、過大評価 (overestimation)、過小評価 (underestimation)

1. はじめに

形成的評価の重要性が強調されているが、その中で自己評価も大切な評価の一つである。しかし、学習者の過大評価や過小評価など問題点もある。そのような中において、学習者の自己評価についての意識の傾向を知ることは、教授者にとって必要なことであると思われる。そして、この意識は個人によっても異なるが、男女間にも差があるだろうと推測できる。自己評価をさせた場合、女子の方が一般的に評価が低いと思えることがある。また、高校生の場合、大学入試センター試験の結果、弱音をはいて二次受験校のランクを下げるのも、女子に多いように思える。そして、この傾向は大学生にまで引き継がれているように感じられる。

今回、高校生と大学生を対象に、どれくらい自分の学力を過大評価したり過小評価したりするかを調べた。教授者の指導や評価の一助にするこ

とができれば幸いである。

2. 実験研究

2.1 目的および文献

学習者に「クラスの中で、自分の英語の学力は、5段階のどこに位置すると思うか」というアンケート形式の調査をすることにより、実際の学力（学習成績）の段階とアンケートの段階とを比較した。すなわち、自分の学力を過大評価しているのか、過小評価しているのか、または適切に評価しているのかについて明らかにしたい。さらに、男女間にその意識の差があるのかどうかについても調べたい。ただ、大学生については女子のみのデータとなってしまった。被験者全員には5段階正規分布図の意味と割合などについて説明を加えてある。[5段階のアンケート用紙については最終頁参照]

さて、自己評価について、Underhill (1989) は次のように述べている。

... Women in general will often rate themselves lower than men when they are, in fact, at least as good; similarly, older learners will often rate themselves lower than younger learners.

2.2 仮説

- 1) 日本の学習者は、一般的に自分の学力を過小評価している。
- 2) 女子は、自分の学力をさらに過小評価している。

2.3 被験者内訳：高校生 1年生1組（特進）40名、2組（普通）40名
 3年生1組（特進）40名、2組（普通）39名
 大学生 1年生A組 46名、B組 36名、C組 35名
 2年生D組 37名、E組 36名

2.4 分析方法 [Hatch (1982), 内藤 (1996)]

偏差値 (DEVIATION VALUE) [級内での相対的位置を調べ、5段階に分ける]、
 平均 (MEAN)、標準偏差 (STANDARD DEVIATION=SD)、
 KR-21 (KUDER-RICHARDSON 21 FORMULA) [rt= テストの信頼度係数]、
 相関係数 (PEASON PRODUCT MOMENT COEFFICIENT) [英語2科目間の相関]
 t-test [平均点の有意差検定]、 χ^2 -test [アンケート項目間の有意差検定]
 有意水準は 5% (*), 1% (**), 0.1% (***) の3つ
 ☆高校生については、英語2科目を用いているので、科目間の相関係数も表示している。

2.5 結果および分析

段階と偏差値 (例)

TABLE 1	段階	偏差値
	5	60.2 -
	4	53.3 - 60.1
	3	46.4 - 53.2
	2	39.4 - 46.3
	1	- 39.3

高校 (男子と女子)

1年1組

TABLE 2		英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差	TABLE 3 t-test
クラス	NUMBER	40	40	40		t=2.782, df=71
	MEAN	69.38	3.05	2.33	0.73	** p<0.008
	SD	10.46	1.30	0.96		
	rt	0.81				
男子	NUMBER	20	20	20		t=0.531, df=33
	MEAN	65.70	2.60	2.40	0.20	p<0.6
	SD	11.54	1.36	0.92		
女子	NUMBER	20	20	20		t=3.738, df=38
	MEAN	73.05	3.50	2.25	1.25	*** p<0.001
	SD	7.65	1.07	0.99		

TABLE 4

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	10%	15%	25%
女子	0%	40%	10%
合計	10%	55%	35%

TABLE 5

段階の人数分布

段階	実際	アンケート	英語 I と英語 OC の相関 = 0.85 *** p<0.001	
5	6	0		
4	9	3		
3	11	18		
2	7	8		
1	7	11		

1 年 2 組

TABLE 6

		英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差	TABLE 7 t-test
クラス	NUMBER	40	40	40		t=3.458, df=78
	MEAN	56.70	3.23	2.38	0.85	*** p<0.001
	SD	15.70	1.19	0.97		
	rt	0.91				
男子	NUMBER	19	19	19		t=1.757, df=36
	MEAN	55.74	2.95	2.37	0.58	p<0.1
	SD	9.98	1.00	0.98		
女子	NUMBER	21	21	21		t=3.244, df=40
	MEAN	61.57	3.48	2.38	1.10	** p<0.003
	SD	14.50	1.19	0.94		

TABLE 8

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	15%	20%	13%
女子	2%	37%	13%
合計	17%	57%	26%

TABLE 9

段階の人数分布

段階	実際	アンケート	英語 I と英語 OC の相関 = 0.81 *** p<0.001	
5	7	0		
4	8	4		
3	10	16		
2	9	11		
1	6	9		

3年1組

TABLE 10

		英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差	TABLE 11 t-test
クラス	NUMBER	40	40	40		t=3.061, df=71
	MEAN	70.28	3.15	2.38	0.77	** p<0.002
	SD	12.67	1.22	0.91		
	rt	0.88				
男子	NUMBER	24	24	24		t=3.321, df=46
	MEAN	73.67	3.42	2.58	0.84	* p<0.02
	SD	12.77	1.22	1.00		
女子	NUMBER	16	16	16		t=2.394, df=30
	MEAN	65.19	2.75	2.06	0.69	* p<0.03
	SD	10.67	1.09	0.66		

TABLE 12

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	5%	48%	7%
女子	0%	25%	15%
合計	5%	73%	22%

TABLE 13

段階の人数分布

段階	実際	アンケート	英語 B と英語 C の相関 = 0.84 *** p<0.001	
5	3	1		
4	15	3		
3	12	12		
2	8	18		
1	2	6		

3年2組

TABLE 14		英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差	TABLE 15 t-test
クラス	NUMBER	39	39	39		t=2.123, df=76
	MEAN	65.03	2.97	2.38	0.59	* p<0.04
	SD	16.02	1.27	1.15		
	rt	0.92				
男子	NUMBER	14	14	14		t=0.663, df=26
	MEAN	55.57	2.29	2.00	0.29	p<0.6
	SD	13.77	1.16	1.07		
女子	NUMBER	25	25	25		t=2.299, df=48
	MEAN	70.32	3.36	2.60	0.76	* p<0.03
	SD	14.70	1.16	1.13		

TABLE 16

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	5%	18%	13%
女子	5%	38%	21%
合計	10%	56%	34%

TABLE 17

段階の人数分布

段階	実際	アンケート	英語Bと英語Cの相関 = 0.85*** p<0.001
5	7	2	
4	5	4	
3	12	12	
2	10	10	
1	5	11	

TABLE 18

アンケート全クラスの分析／人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	9%	25%	14.5%
女子	2%	35%	14.5%
合計	11%	60%	29%

合計の3項目間のカイ自乗検定

$$\chi^2 = 37.858, df = 2$$

*** p<0.001

大学（女子のみ）

1 年 A 組

TABLE 19		英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差	TABLE 20 t-test
クラス	NUMBER	46	46	46		t=3.348, df=80
	MEAN	69.00	3.20	2.39	0.40	** p<0.002
	SD	16.13	1.33	0.93		
	rt	0.93				

TABLE 21

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
女子	20%	56%	24%

TABLE 22

段階の人数分布

段階	実際	アンケート
5	8	1
4	13	2
3	13	20
2	4	14
1	8	9

1 年 B 組

TABLE 23		英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差	TABLE 24 t-test
クラス	NUMBER	36	36	36		t=2.576, df=64
	MEAN	65.80	3.36	2.57	0.79	* p<0.02
	SD	16.50	1.45	1.09		
	rt	0.93				

TABLE 25

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
女子	7%	57%	36%

TABLE 26

段階の人数分布

段階	実際	アンケート
5	7	2
4	13	3
3	8	13
2	1	13
1	7	5

1 年 C 組

TABLE 27		英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差	TABLE 28 t-test
クラス	NUMBER	35	35	35		t=2.149, df=49
	MEAN	66.70	2.49	1.89	0.60	* p<0.04
	SD	13.86	1.46	0.72		
	rt	0.89				

TABLE 29

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
女子	25%	44%	31%

TABLE 30

段階の人数分布

段階	実際	アンケート
5	6	0
4	1	0
3	9	7
2	8	17
1	10	11

2 年 D 組

TABLE 31		英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差	TABLE 32 t-test
クラス	NUMBER	37	37	37		t=2.348, df=66
	MEAN	49.50	3.49	2.78	0.71	* p<0.03
	SD	23.82	1.45	1.09		
	rt	0.97				

TABLE 33

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
女子	0%	54%	46%

TABLE 34

段階の人数分布

段階	実際	アンケート
5	14	2
4	5	5
3	6	19
2	9	5
1	3	6

2年E組

TABLE 35		英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差	TABLE 36 t-test
クラス	NUMBER	36	36	36		t=2.654, df=70
	MEAN	67.90	3.06	2.44	0.62	** p<0.002
	SD	20.88	1.57	1.21		
	rt	0.96				

TABLE 37

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
女子	19%	44%	37%

TABLE 38

段階の人数分布

段階	実際	アンケート
5	8	4
4	8	1
3	7	9
2	4	15
1	9	7

TABLE 39

アンケート全クラスの分析／人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
合計	14%	51%	35%

合計の3項目間のカイ自乗検定

$$\chi^2 = 20.660 \quad df = 2$$

*** p<0.001

2.6 考 察

偏差値の段階は、仮に得点を0から100まで並べ、それを5等分してみたものである [TABLE 1]。すなわち、1段階は39.3以下、2段階は39.4から46.3、3段階は46.4から53.2、4段階は53.3から60.1、5段階は60.2以上の場合である。この例の様に、各組の得点を偏差値で表し段階をつけた。

それでは、実際の英語の学力の段階とアンケートの段階に、どのような差があるのかを見ていこ

う。まず、高校生である。

1年1組 [TABLE 2]。クラスの英語の平均は69.38、標準偏差は10.46、信頼度は0.81である。テストとして、信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は3.05、標準偏差は1.30、アンケートの段階の平均は2.33、標準偏差は0.96である。t検定 [TABLE 3]により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には1%水準で有意差がある。男子は、平均が65.70、標準偏差は11.54である。実際の学力の段階の平均は

2.60、標準偏差は 1.36、アンケートの段階の平均は 2.40、標準偏差は 0.92 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には有意差は見られない。女子は、平均が 73.05、標準偏差は 7.65 である。実際の学力の段階の平均は 3.50、標準偏差は 1.07、アンケートの段階の平均は 2.25、標準偏差は 0.99 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 0.1% 水準で有意差がある。従って、クラス全体が、自分の学力を過小評価していると言える。男子と女子に分けると、女子は自分の学力を明らかに過小評価していると言える。しかし、男子はそうとは言えない。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 4] からとも言える。これによると、男子では過大評価しているものが 10% いるが、女子は 0% である。これに対し、過小評価しているものは、男子では 15% であるが、女子では 40% も見られる。さて、実際の段階の人数分布であるが、3 段階が最も多く比較的ノーマルな形である [TABLE 5]。また、英語の学力点は、英語 I (R) と英語 OC (含 GRAMMAR) の合計の平均を用いているが、それら 2 科目の相関係数は 0.88***で 0.1% 水準で有意な強い相関があり、学力点が安定し信頼性が高いと言える。

1 年 2 組 [TABLE 6]。クラスの英語の平均は 56.70、標準偏差は 15.70、信頼度は 0.91 である。テストとして、これも信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 3.23、標準偏差は 1.19、アンケートの段階の平均は 2.38、標準偏差は 0.97 である。t 検定 [TABLE 7] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 0.1% 水準で有意差がある。男子は、平均が 55.74、標準偏差は 9.98 である。実際の学力の段階の平均は 2.95、標準偏差は 1.00、アンケートの段階の平均は 2.37、標準偏差は 0.98 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には有意差は見られない。女子は、平均が 61.57、標準偏差は 14.50 である。実際の学力の段階の平均は 3.48、標準偏差は 1.19、アンケートの段階の平均は 2.38、標準偏差は 0.94 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 1% 水準で有意差がある。従って、クラス

全体が、自分の学力を過小評価していると言える。男子と女子に分けると、女子は自分の学力を明らかに過小評価していると言える。しかし、男子はそうとは言えない。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 8] からとも言える。これによると、男子では過大評価しているものが 15% いるが、女子は 1% である。これに対し、過小評価しているものは、男子では 20% であるが、女子では 37% も見られる。さて、実際の段階の人数分布であるが、3 段階が最も多くかなりノーマルな形である [TABLE 9]。また、英語の学力点は、英語 I (R) と英語 OC (含 GRAMMAR) の合計の平均を用いているが、それら 2 科目の相関係数は 0.81***で 0.1% 水準で有意な強い相関があり、このクラスでも学力点が安定し信頼性が高いと言える。

3 年 1 組 [TABLE 10]。クラスの英語の平均は 70.28、標準偏差は 12.67、信頼度は 0.88 である。テストとして、これも信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 3.15、標準偏差は 1.22、アンケートの段階の平均は 2.38、標準偏差は 0.91 である。t 検定 [TABLE 11] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 1% 水準で有意差がある。男子は、平均が 73.67、標準偏差は 12.77 である。実際の学力の段階の平均は 3.42、標準偏差は 1.22、アンケートの段階の平均は 2.58、標準偏差は 1.00 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 5% 水準で有意差がある。女子は、平均が 65.19、標準偏差は 10.67 である。実際の学力の段階の平均は 2.75、標準偏差は 1.09、アンケートの段階の平均は 2.06、標準偏差は 0.66 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 5% 水準で有意差がある。従って、クラス全体が、自分の学力を過小評価していると言える。男子と女子に分けても、両方とも自分の学力を過小評価していると言える。比較的難易度の高い大学の受験を間近に控えた生徒達はこのような傾向を示すのかも知れない。しかし、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 12] によれば、男子には過大評価しているものが 5% いるが、女子は 0% である。そして、過

小評価しているものは、男子では 48% であるが、女子では 25% と 1 年生とは少し異なった傾向を示している。さて、実際の段階の人数分布であるが、良くできるクラスということもあり、4 段階が最も多く次に 3 段階という形である。[TABLE 13]。また、英語の学力点は、英語 B (READING) と英語 C (WRITING) の合計の平均を用いているが、それら 2 科目の相関係数は 0.85^{***} で 0.1% 水準で有意な強い相関があり、このクラスでも学力点が安定し信頼性が高いと言える。

3 年 2 組 [TABLE 14]。クラスの英語の平均は 65.03、標準偏差は 16.02、信頼度は 0.92 である。テストとして、これも信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 2.97、標準偏差は 1.27、アンケートの段階の平均は 2.38、標準偏差は 1.15 である。t 検定 [TABLE 15] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 5% 水準で有意差がある。男子は、平均が 55.57、標準偏差は 13.77 である。実際の学力の段階の平均は 2.29、標準偏差は 1.16、アンケートの段階の平均は 2.00、標準偏差は 1.07 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には有意差は見られない。女子は、平均が 70.32、標準偏差は 14.70 である。実際の学力の段階の平均は 3.36、標準偏差は 1.16、アンケートの段階の平均は 2.60、標準偏差は 1.13 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 5% 水準で有意差がある。従って、クラス全体が、自分の学力を過小評価していると言えるが、男子と女子に分けると、女子は自分の学力を過小評価していると言える。しかし、男子はそうとは言えない。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 16] からとも言える。これによると、男子では過大評価しているものが 5%、女子でも 5% である。これに対し、過小評価しているものは、男子では 18% であるが、女子では 38% も見られる。さて、実際の段階の人数分布であるが、3 段階が最も多く比較的ノーマルな形である [TABLE 17]。また、英語の学力点は、英語 B (READING) と英語 C (WRITING) の合計の平均を用いているが、それら 2 科目の相関係数は 0.85^{***} で 0.1% 水準で有意な強い相関

があり、このクラスでも学力点が安定し信頼性が高いと言える。

アンケート全クラスの分析／人数と百分率 [TABLE 18] を見ると、男女の合計では 11% が過大評価しているが、大多数の 60% が過小評価している。適切な評価をしているのは 29% である。そして、 χ^2 検定でも、これら 3 つの項目間には 0.1% 水準で有意差がある。男女別では、過小評価をしているのが、男子では 25%、女子では 35% で、女子の方が過小評価している傾向が強い。

それでは、大学生についてである。1 年 A 組 [TABLE 19]。クラスの英語の平均は 69.00、標準偏差は 16.13、信頼度は 0.93 である。テストとして、信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 3.20、標準偏差は 1.33、アンケートの段階の平均は 2.39、標準偏差は 0.93 である。t 検定 [TABLE 20] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 1% 水準で有意差がある。従って、このクラスは自分達の学力を過小評価していると言える。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 21] から読み取れる。これによると、過大評価が 20%、過小評価が 56%、適切な評価が 24% である。さて、実際の段階の人数分布であるが、3 段階が最も多く比較的ノーマルな形である [TABLE 22]。

1 年 B 組 [TABLE 23]。クラスの英語の平均は 65.80、標準偏差は 16.50、信頼度は 0.93 である。テストとして、信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 3.36、標準偏差は 1.45、アンケートの段階の平均は 2.57、標準偏差は 1.09 である。t 検定 [TABLE 24] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 5% 水準で有意差がある。従って、このクラスも自分達の学力を過小評価していると言える。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 25] からとも言える。この場合、過大評価が 7%、過小評価が 57%、適切な評価が 36% である。実際の段階の人数分布は、4 段階が多く次に 3 段階であり、若干成績上位層が多い [TABLE 26]。

1 年 C 組 [TABLE 27]。クラスの英語の平均は 66.70、標準偏差は 13.86、信頼度は 0.89 であ

る。テストとして、信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 2.49、標準偏差は 1.46、アンケートの段階の平均は 1.89、標準偏差は 0.72 である。t 検定 [TABLE 28] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 5% 水準で有意差がある。従って、このクラスも自分達の学力を過小評価していると言える。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 29] からとも言える。この場合、過大評価が 25%、過小評価が 44%、適切な評価が 31% である。実際の段階の人数分布は、若干成績下位層が多い [TABLE 30]。

2 年 D 組 [TABLE 31]。クラスの英語の平均は 49.50、標準偏差は 23.82、信頼度は 0.97 である。テストとして、非常に信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 3.49、標準偏差は 1.45、アンケートの段階の平均は 2.78、標準偏差は 1.09 である。t 検定 [TABLE 32] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 5% 水準で有意差がある。従って、このクラスも自分達の学力を過小評価していると言える。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 33] からとも言える。この場合、過大評価が 0%、過小評価が 54%、適切な評価が 46% である。実際の段階の人数分布は、若干成績上位層が多い [TABLE 34]。

2 年 E 組 [TABLE 35]。クラスの英語の平均は 67.90、標準偏差は 20.88、信頼度は 0.96 である。テストとして、非常に信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 3.06、標準偏差は 1.57、アンケートの段階の平均は 2.44、標準偏差は 1.21 である。t 検定 [TABLE 36] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 1% 水準で有意差がある。従って、このクラスも自分達の学力を過小評価していると言える。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 37] からとも言える。この場合、過大評価が 19%、過小評価が 44%、適切な評価が 37% である。実際の段階の人数分布は、若干成績上位層と下位層に分かれている [TABLE 38]。

アンケート全クラスの分析／人数と百分率 [TABLE 39] を見ると、14% が過大評価してい

るが、大多数の 51% が過小評価している。適切な評価をしているのは 35% である。そして、 χ^2 検定でも、これら 3 つの項目間には 0.1% 水準で有意差がある。やはり女子大生においても自分の学力を過小評価していると言える。

結論として、高校・大学全クラスにおいて、仮説 1) は支持された。仮説 2) は、高校の 4 クラスの内 3 クラスでは支持されたが、大学受験、特に難易度の高い大学を目指す生徒達（ここでは 3 年 1 組）においては、男子も女子も自分の学力を過小評価しているので、女子だけではなかったと言える。大学生は全員女子で男女の比較はできなかったが、仮説の自分の学力を過小評価するというのは支持されている。

3. おわりに

これまで見てきたように、私がデータをとった日本の高校生と大学生は全体的に自分の学力を過小評価していると言える。これは、謙虚な国民性と熾烈な受験競争などが考えられる。そして、この傾向は高校から大学にまでも受け継がれていると言える。

我々教師は、学習者に自信をもたせ、萎縮させないように気をつけなければならないといえよう。さらに、多くのクラスで、女子にこの傾向が強く見られる。内藤 (2000) の研究において、同年代のオーストラリア人が、特に女子において自分の学力を過大評価する傾向が強いのは対照的であった。以上の結果は、今後の指導や評価に生かすことができると考えられる。

引用文献：

- Hatch, Evelyn and Hossein Farhady, *Research Design and Statistics for Applied Linguistics*, Newbury House Publishers, Inc., pp. 192-214. (1982)
- 内藤 徹, 『新しい 英語教育ハンドブック』リーベル出版, pp.17-37. (1996)
- 内藤 徹, 「高校生の学力意識に関する研究－生徒全体の傾向と男女の差について」『中部地区英語教育学会紀要 29』pp.365-370. (1999)
- 内藤 徹, 「オーストラリア中等学校生の学力意識に関する研究－日・豪比較も含めての考察」『中部地区英語教育学会紀要 30』pp.205-210. (2000)

Underhill, Nic, *Testing Spoken Language: A handbook of oral testing techniques*, Cambridge University Press, p.23. (1989)

参考文献

Cohen, Andrew D., *Testing Language Ability in the Classroom*, Newbury House Publishers, Inc. (1980)

Madsen, S. Harold, *Techniques in Testing*, Oxford University Press. (1983)

Richards, C. Jack and Schmidt, W. Richard, *Language and Communication*, Longman Group Limited. (1984)

Richards, Jack, John Platt and Heidi Weber, *Longman Dictionary of Applied Linguistics*, Longman Group Limited. (1985)

Rivers, M. Wilga, *Teaching Foreign-Language Skills*, The University of Chicago Press. (1981)

Templeton, H., "A New Technique for Measuring Listening Comprehension", *ELT Journal* 31, 4, July, 292-299. (1977)

Widdowson, H. G., *Explorations in Applied Linguistics*, Oxford University Press. (1979)

Widdowson, H. G., *Teaching Language as Communication*, Oxford University Press. (1985)

資料：

アンケート用紙

_____ grade _____ class No. _____ Name _____

Please indicate (circle) the level which best describes your English ability in this class.

- (5) Upper
- (4) Upper middle
- (3) Middle
- (2) Lower middle
- (1) Low

